

令和7年度人権擁護のためのセルフチェックリストの実施結果（令和8年1月実施）

全国保育士会が作成した「保育所・認定こども園における人権擁護のためのセルフチェックリスト～「子どもを尊重する保育」のために～」を使用し実施。全設問に対して96.03%が望ましい対応でしたが、約4%望ましくない対応をしてしまっていたかも…という反省がありました。内容と改善策は下記の通りです。

■子ども一人ひとりの人格を尊重しない関わり

- ◆排泄の失敗への対応をその場で行ったり、周囲に知らせたりする。
- ◆子どもがお友だちを叩く等、良くないことをした際に、執拗に責めるような言葉掛けをする。
- ◆子どもが保育者に話しかけた際、「いま忙しいから後にして」という。
- ◆自分から訴えてトイレに行けるようになった子どもに対して「おしっこでない」と訴えていてもトイレに行くように促す。

【改善策等】

子どもたちは一人の人として対等に扱われるべき存在であることを心にとめる。また、自ら伝えようとする意欲や社会性を奪うこと、批判に繋がるような表現は避け、子ども自身が気持ちを大切にされていると感じ、安心して表現できる環境を整えていく。

集団生活として、直ぐに対応することが難しいことは多々ある。心の準備として、対応が難しい状況を分かりやすく伝える方法を考えたり、代替案や別の保育者に引き継ぐなど、丁寧な関わりを行っていく。

言葉掛けについては、子どもの心を傷つけ、恐怖感を味わうことのないように、言葉選びを意識し、子どもの安心感や尊厳を守る関わりを意識し、一緒に考え行動に移すことを大切にしていく。

時に、子どもの行動に危険が伴うと判断した場面は、状況の深刻さが伝わるように、短く分かりやすい言葉で、声のトーンを変えるなど、工夫しながら伝える。

子どもの育ちの段階に合わせた尊重すべき違いを大切にし、子どもの様子を見ながら、丁寧な言葉のやりとりを心がける。

■物事を強要するような関わり・脅迫的な言葉掛け

- ◆集団行動をするための言葉がけをした際、言葉がけを聞かない子どもに「〇〇しないなら〇〇できないからね」と言葉をかける。
- ◆寝ずに話をしている子どもに対して、布団を友だちの布団と離して敷いたりする

【改善策等】

子ども一人ひとりに合わせた対応を行い、子どもが前向きに行動できるような言葉がけを大切にする。

子どもが納得し、見通しを持てるように事前に環境を整備したり、肯定的な言葉がけをしていく。

また、職員間で保育の振り返りを繰り返し、子どもの人権が守られる保育が実施できているか確認していく。

■一人ひとりの子どもの育ちや家庭環境を考慮した関わり

- ◆「お休みの日にどこに行ったかお話しして」とクラスの子どもたち全員に発表してもらう。
- ◆いつも時間ぎりぎりのお迎えになる子どもに対して「〇〇ちゃんのお母さん、今日も遅いね」と言う。

【改善策等】

子どもの思いを受け止めつつ家庭生活のことを比べるようなことにならないよう配慮していく。また、仕事との両立での育児は大変だということを理解し、保護者への思いをあたためる。

■差別的な関わり

- ◆差別的な関わりとして、特定の子どもにだけ「おはよう」と言葉がけをする。
- ◆寝かしつける際にいつも同じ子どものそばにつく。

【改善策等】

気持ちが不安定になる子への関わりを行いながらも、個人差や個別の対応により、子どもが差別感を味わっていないか、子どもの側に立って考えていく。

令和7年度職員自己評価の実施結果における考察

まりあ保育園 園長 鈴木久敬

自己評価結果として、まりあ保育園で大切にしている「優しさ」「あたたかさ」を職員全体で意識し日々保育をしていることを感じました。

一方で、優しさから「言いにくい」「言ったら傷つけてしまいそう」「自分が意見するなんておこがましい」等の気持ちが多くの職員にあります。職員の心理的安全をさらに向上させるためにも、今後は「知らないことは質問していい」「失敗したことは共有して自分たちの学びの機会とする」「気づいたことは言った方がいい」という風土を毎日の習慣の中で積み重ね築いていき、「たとえ対人的なリスクをとってもこのチームは安全である」という共通認識を職員全員が持ち、恐れを乗り越えて挑戦しやすい環境を構築し、保育の質の向上に繋げていけたらと思います。

日頃の保育環境に関しては、文部科学省が発信している『遊びは学び 学びは遊び やってみたいは学びの芽』の通り、子どもの"今"の興味に寄り添った準備がされているか、保育環境・給食環境はその都度再構成されているか等を職員間で更に語り合いながら意識していかなければなりません。

職員も子どもたちも「百聞は一見にしかず」「百見は一考にしかず」「百考は一行にしかず」とあるように『やってみよう』という気持ちを忘れず、評価項目にもあった実践を通して共に学びあう共主体(きょうしゅたい)の姿勢で保育をしていきたいと思っています。